

腹立つ心

どんなことで

甲「先生。私は他人に対してよく腹が立っていきません。どうしたら腹が立たなくなりますか。教えていただきたいのです。」

乙「どんなことでよく腹が立ちますか。」

甲「どんなことと言つて……私は、人から疑われたり、私のほんとの心を知つてくれない時、いちばんよく腹が立ちます。」

乙「腹がよく立つことについて、次のことを考えて見ましょう。」

- 1、何故に腹が立つのか。
- 2、どんな場合に腹が立つか。
- 3、腹が立つてどうしたか。

それです。第一ですが、なぜに腹が立つたか。あなたは、人が疑つたり、心を知つてくれない時によく腹が立つと言いますが、いちおうもつともです。しかしあなたが他人に疑われた時、考えて見なくてはなりません。だれでも疑われるのです。私だつて、あられもないことでもいろいろを言われます。しかし、疑われたのは、疑われたのであつて、ほんとうがそうかどうかではありません。疑われた、悪口されたということよりは、自分のほんとうだかどうかだつたか、もつと問題でしょう。念仏の中にもつとはつきり自分をつかめば、疑われることは嫌なまに黙して生ききられる世界があります。」

甲「疑われても、弁解せずに忍べと言われるのですか。」

乙「時には、弁解してもいいかも知れません。しかし、それよりもつと考えて見なくてはならないことは、他人のことをいろいろと疑つたり、憶測したり、邪推したり、悪口したり、罵つたり、ことさらに陥れるために、ないことを造つて言つたりすることは、そのこと自身が、その人の人格の全体を亡ぼしていることです。その人の全体を泥の中に棄てていることです。それによつて、相手の人はいちおう傷ついています。しかしけつして真に傷つくものではありません。私は、どんなことに会つても平気だという人もあまり好きませんが、またそれを気にして、自分の全体が亡んだように悲しむ人の無信念がもつといやです。悪く言われたこと、疑われたことよりも、それによつて、あなたのように動揺することこそ、人格の本質を失うゆえんであります。」

馬鹿になる工夫

甲「確かに私は、そのお言葉によつて、相手の人と同様な弱者であることを知りました。」

乙「もしあなたが、世の無責任な冷たい言葉にも教訓を受け取るならば、あなたはけつして損をしないのみならず、このあなたの態度が、あなた自身の人格の光なの

です。私どもは、壁に耳をよせ、草の根にも耳をすまして、自分自身を育てるためにはどんな時にも処にも教えを受け取らなくてはなりません。」

甲「お恥ずかしいしだいです。私などとても自分を尊重することが足りません。」

乙「何ゆえに腹が立つか。それを考えて見ると、まったく自己尊重の足らぬ場合が多いのです。その大部分は、五欲の満足を碍げられた場合です。その中でも、あなたのは、名利心の満足が碍げられて、自尊心が傷つけられた場合です。しかし自分で慢心をおこし、自分で自分を高くしたところで、だれも高く買ってはくれません。自利心を克服して、馬鹿になれる工夫をいたしましょう。とにかく念仏がたいせつです。第二はどんな場合に腹が立つかです。」

私憤と公憤

乙「百万長者に向かつて、この貧乏たれと言ったところで、問題にしないでしよう。しかし貧しい者にむかつてこの貧乏人めと言ったら、きつと怒るでしょう。つまり、自分のいちばん弱点に触れられた時、怒るのです。ですから、その人の怒る場合を見れば、その人の人格がわかるわけです。」

甲「私など小さいことでよく腹を立てたものですね。」

乙「一度怒れば、天下治まるといった怒り方もあるわけですが、小さいことに怒るのは女子と小人と言われています。正義が蹂躪されるような場合に奮然起つて戦うような場合にはまだしも、自分一個の小さい我欲のために怒るがときは、男のなすべきではありません。世に小事に腹を立てる場合を私憤と言ひ、正義大事のため²に怒るを公憤と言っています。何がどうなつても何ともない、どんなに悪がはびこつて、多くの人が泣いていようと、知らぬ顔しているということは、私利私欲の徒であるか、卑怯の人間のしていることです。」

甲「そんな場合には、知らぬ顔して、小さいことにばかり腹を立てています。」
乙「公憤はすでに怒りは怒りでも、本質的には怒りではないかも知れません。仏が一切衆生を救うのも、その大慈悲のしからしむるところであります。われらが社会に活眼を開けば、必ず公憤を感じずにはいられません。そこには、必ず破邪顕正の歩みが始められます。親鸞聖人もまた、真実が蹂躪されることを見るに忍びず、奮然として、顕真実のために起たれました。」

甲「聖人にもそんな強い処があつたのですか。」

怒は敵

乙「ありましたとも。御本典の後序に、御本典作製の縁由を明かして、『主上臣下法にそむき義に違す』と言つていられます。しかしそれはもちろん通りいつぺんの公憤ではなくて、真実を領得し、伝承せるものの報恩謝徳の営みではあります。聖人はけつして、いかなる場合にも、死の平和を保とうとなぎつた方ではありません。私は思います。怒る心はけつしていい心ではありませんが、しかしすべておきて来るものには必ず理由があります。腹を立てない者が尊いなら、木石もまた尊いはずです。ですから腹を立てるといふことよりも、『何ゆえに怒つたか』ということが問

題だと思えます。恥ずべきことは、経に『少しくこれを侵せば便ち大いに怒る』すなわち私憤をこそ恥としなければなりません。しかしなかなか大きなことには平気で小さい事に本気なものであります。そこで『怒りは敵と思え』と言った方が無難であります。」

懺悔

甲「なんだか、頭から打ちのめされたような気がします。つまらぬことのみよく怒ったものであります。」

乙「第三は、怒ってどうしたか。それを考えて見ましょう。だれでも死ぬるまで、度数の差こそあれ怒りの心の絶対におきない者はいません。よく人は、あとになつてから気がついて、悪かつたと思うのだからつまらないと言います。」

甲「私もそう思います。いつも後の祭です。」

乙「しかしはたして、後になつて気がついているのでしようか。悪かつたと気がついて、あやまるべきはあやまり、懺悔すべきは懺悔していでるでしようか。ただ単に静まつただけであつて、そのままになつていいるのではありますまいか。あるいはまた、静まつたようでも心の底には、根が残つていて、やはり何かの機縁にふれると、再び爆発しそうなままで恨みを抱いてはいないでしようか。それはおそるべきことです。世には、幾十百度も返し返されて、ついに救うべからざる深手となり、その恨みだけで一生をはてる者すらあります。これは必ず第一の怒りをそのままにして、後で悪に気がつかず、懺悔せず、念仏の心なく、一念の信力も、心のどん底₃を耕すによしなく、ついに重なり重なつて、大事に至つたのであります。」

甲「そのとおりであります。私どもも教えを受けないでいると、ついにほそなつたかも知れません。」

乙「ですからお互に腹が立つたら、静かに、言葉に出さず、行動に移さず、じつと思念して、善知識の仰せ、如来の大悲のみ心、智慧光の輝きの中に、静かに念仏いたしましょう。その時必ず私の生きねばならぬ世界がわかり、一段と深い自己もわかり、如来の大悲も知らされ、より深く念仏の尊さも知られるであります。かくして、小さいことによく腹を立てている自己のあさましさが知れて、十度が八度、五度が三度と、怒りを遠ざかつて、自分自身の徳を汚さず、三毒が念仏に生かされて、如来浄土の眷属たる使命が細々成就せられるであります。」

甲「ありがとうございます。これから気をつけます。確かに、前も、後もその時も、でたらめであつたのです。如来の心を離れていました。」

乙「お互いに念仏申しましょう。」